

銀細工の剣

彼女の日記

「ラフ、これを。」

病床上に臥せった父から渡されたのは、古びた日記帳であった。真っ黒な表紙の真ん中に、百合の紋章が描かれている簡素な日記帳。

「これは？」

「先祖代々引き継いできた日記だ……死ぬ前に、お前にこれを渡さなくてはならないと思つてな……。」

父はそう言うと、ぱたりと手をベッドに落とした。私は渡された日記帳を抱きしめる。父の手を握れなかった悲しみのかわりに。

何故この日記が引き継がれてきたのか、幼い私は知らないまま、ただ父に渡されたからという理由で大事に大事に棚の奥底にしまい込んでいた。

……その意味を知ったのは、何十年と経った、老人になつてからのことであつた。

「アンネ？ どうしたの？」

「んー……あ、あつたわ！」

アンネと呼ばれた少女は、廃墟と化した屋敷の中を漁っていたが、やがて目当てのものを見つけたのか満足げな笑顔を浮かべながら顔をあげた。その手に持っているのは、真ん中に百合の紋章が描かれた黒い日記帳だつた。ひどく劣化していて、ページをめくるたびにポロポロと紙が崩れてしまいそうである。

「それは？」

「とても可愛らしい人が、私たちについて書いてくれた日記帳よ！ これをもつていかなくてはと思つて。」

アンネはそう言つていつそう笑みを深める。その様子に、彼女のそばにいた少年は不思議そうな顔をした。何が何だか分からない、と言いたげな少年に、アンネは説明をはじめた。

「覚えてらっしゃる？ むかし、ピアノを聴きに

いったことがあるでしょう？」

「……ああ、あの仮面をつけていた……。」

「そう！ その人のお世話係が書いた日記帳なの。」

「彼女か。覚えてるよ。」

「良かった！ でね、この日記帳は、彼女と出会ったときのことが詳しく書かれているみたいなの。だから持つていかなくてはと思つて。」

アンネは言い、大事にそうに日記帳を抱きしめた。そして廃墟と化した屋敷のところどころにわずかに残っている枯れはてた薔薇の花を避けながら、ゆっくりと歩き出す。

その白銀の髪には、白百合を象つたバレッタが飾られていた。

「……そうだね。 万が一、誰かに見られでもしたら大変だ。」

「そうじゃないわ。」

「え？」

アンネは立ち止まる。そして少年の方にくると向いて、また笑みを浮かべた。

「彼女のかわりに連れていくの。時を超えた先へ。」

言つて、背を向けて歩き出す。少年は肩をすくめて、アンネのあとを追いかけた。